

これから埋め立てが強行されようとしている大浦湾（手前）には、多くの作業船や海上保安庁の船などがひしめいています。点線で囲っている辺野古崎南側では、埋め立てはほぼ完了。沖縄島周辺で最大の規模を誇る海草藻場が広がり、

ジュゴンのえさとなる海草など生物多様性豊かな海は失われました。それでも辺野古新基地建設全体の埋め立て進捗率は2023年12月末時点で約15.8%。右端の点線で囲った部分が海上ヤード建設現場＝1日、沖縄県名護市（小型無人機で撮影）

辺野古新基地 空から見た大浦湾



貴重な生態系〃生き埋め、民主主義と地方自治破壊 沖縄県民は屈しない

特集
すいよう



本紙は今月、大浦湾「海」です。世界の誰かの命を奪い、暮らしを奪い、自然を壊す戦争のために大浦湾の生き物を「虐殺」すること、県民は絶対に許さない。「沖縄を二度と戦場にさせない」。こうした県民の心と民意は、国が民主主義と地方自治を壊す、どんな強権をふるおうとも、埋め立てることはできません。

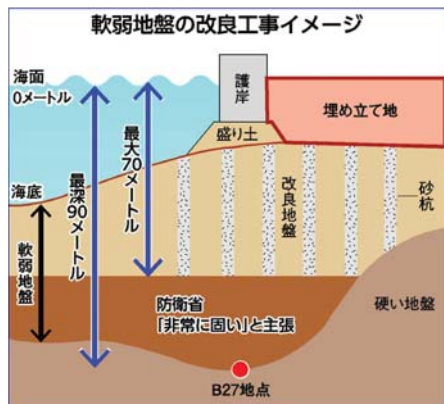
たぐさんの生き物のゆりかご、「希望の海」の大浦湾に巨大な作業船がずかずかと入り込み、貴重な生態系を生き埋めにする「虐殺」が強行されています。沖縄県名護市辺野古の米軍新基地建設をめぐる、防衛省・沖縄防衛局が県の権限を奪う「代執行」で大浦湾側の工事着手を強行してから1カ月以上がたちました。現地は「海を壊すな」「大浦湾を返せ」と、県民の怒りが渦巻いています。（小林司）



米軍キャンプ・シュワブゲート前で抗議の座り込みを行う市民。1月11日、沖縄県名護市辺野古



石材を投入する台船に向かって抗議の声を上げる。新基地反対協議会のメンバーら。11月15日、沖縄県名護市辺野古沖



大浦湾は、絶滅危惧種262種を含む5334種もの生物が海域から記録され、新種、貴重種、日本初記録種などが多数確認。日本自然保護協会主任の安部真理子さんは、大浦湾は「サンゴ礁にしては珍しく深い起伏を持つ複雑な地形をしていて、これが海域特有の生物多様性を支えている」と指摘。埋め立てを行うことは「日本の大きな財産の喪失」と訴えます（山形将史撮影）



レイアウト 大幡るい

船やカヌーで新基地建設に抗議する「ヘリ基地反対協議会」のメンバーら（手前、○で囲んだ船）とゴムボートで近づく海上保安庁の職員。奥には石材を投入する台船など作業船が並びます。奥が米軍キャンプ・シュワブのある辺野古崎＝1日、沖縄県名護市（小型無人機で撮影）



大浦湾側を埋め立てるには、難工事となる軟弱地盤改良工が必要です。軟弱地盤は最も深いところで海面下90㍎、国内の施工実績は65㍎までしかありません。本格的な工事が始まれば、狭い海域内に1日当たり100隻超の作業船が集中します。地盤改良工事だけでも1年目80隻、2年目62隻、3年目には115隻が作業する計画。大型船のスクリーンで泥が舞い上がり、水が濁る危険も。水の濁りはサンゴなどの生き物の大敵です